

ナショナルトレーニングセンターの在り方に関する検討会議 委員の主な意見（第3回まで）

<強化拠点の必要性について>

- N T C 競技別強化拠点の活用で一番大切なのは、やはり N F の関与であり、どのように活用していくのかを N F が主体的に考えることが非常に重要。
- N F のトップ選手強化の長期的なシナリオの中に、N T C 競技別強化拠点がどのように位置付けられて、N F の活動とどのようにリンクするのかを把握する必要がある。
- パラリンピック競技については、意義や効果等をきちんと把握しないまま来てしまったというようなところがある。オリンピック競技で 10 年かかってやってきたことをどれだけ早くキャッチアップできるか。
- 強化の現場にはうまくいかない課題があるはずで、それを議論しない限り解決しない。
- 事業評価に当たっては、選手強化の成果に係る評価基準とともに、国費で行われている観点から、事業収支に係る評価基準を設けることも非常に大事。

<強化拠点の在り方について>

- 強化と支援と研究が一体でなければ、今のハイパフォーマンススポーツの中で勝ち続けることは難しくなっている。特にパラリンピック競技では、居住地の近くに練習場があり、その近隣で色々なサポートが受けられることが重要。
- オリンピックリオデジャネイロ大会で獲得した 41 個のメダルのうち、40 個が中核拠点にある競技種目だったということを踏まえると、練習拠点と医・科学的なサポートがセットになっていることが重要であることがある程度証明出来ている。
- 「オリ・パラ一体」、「夏季・冬季一体」、これを強化・支援・研究の中でどのように機能させて、どのようにパッケージ化して、どのように共有していくかということが一番のポイントになる。他競技の選手と意見交換をしながら、共に頑張る環境がいい刺激になる。
- N T C 競技別強化拠点は、近隣の大学や医療機関、スポーツ医・科学センターと連携して、中核拠点のような、J I S S、N T C 一体化のシステムを作ることが 1 つの狙いである。
- コーチや選手の育成に関しては、国内に拠点を設けて情報を一元管理して、そこから発信するようにはしていけばよい。

- 欧米の強豪国は、オリンピック競技とパラリンピック競技の強化活動を一緒に行っていて、オリンピック競技で培ってきたノウハウや、エビデンスベース、サイエンスベースの強化が一体化されてうまくいっている。
- 強化拠点間のレベル合わせは、お金を掛けるのではなくて、既存の施設や既存の人的資源を有効活用することで、強化拠点間の知の流れをうまく作って行って、充実させていくことが大事。
- 強化拠点を1つのシステム体として見たときに、問題の構造化、意志決定、資源の有効な利活用などを経営システム論の視点から見直すのは有効ではないか。
- 強化拠点における強化・支援・研究の3つの機能をうまく回していける人が競技団体にいるのか、それともハイパフォーマンスセンターに置くのかということが大きなポイント。
- 人材の循環、流動性、交流によって、ネットワークが機能し、人材育成や雇用の機会の拡大がなされるのではないか。人材の交流を積極的に進める方向を考えていけば良い。

<拠点エリアマネジャーについて>

- 地域の資源を有効活用するため、より広範囲なエリアをカバーするためには、フルタイムの「専門人材」が必要。
- 強化方針が変われば、強化拠点の在り方も変わるので、全体のマネジメントが非常に重要。
- 強化と運営という両方の観点を持ちながらコンソーシアムを確立させるには、拠点エリアマネジャーが連携機関・施設の方たちを求心していくためにも、拠点エリアマネジャーにはそれなりの立場を与える必要がある。
- 拠点エリアマネジャーは、NTC競技別強化拠点の指定期間が長期になることで、その地域の中から育ってくるという側面をもあることも含めてマネジメント人材の発展・育成について検討をしていく必要がある。
- 拠点エリアマネジャーには、NTC競技別強化拠点の基盤整備として、NTC競技別強化拠点の指定要件である近隣施設との提携を行う等の役割を果たしていただきたい。

<医・科学サポート、研究について>

- NFが研究者・科学者目線をどの程度持っていて、必要としているのか。宿泊、食事、リカバリーについては、強化拠点によってかなりばらつきがあり、1つの課題である。

- 医・科学サポートのスタッフを養成するシステムがないので、地方にいる人たちの中で、NTC競技別強化拠点で手厚く医・科学サポートできるスタッフを養成することも大事。
- 夏季競技も冬季競技も、オリンピック競技もパラリンピック競技も、日本のスポーツ科学、スポーツに関する知見はハイパフォーマンスセンターに一極集中して、そこに行けば全部解決できるというぐらいの能力は身に付けておくべきではないか。パラアスリートが持っているものをオリンピック競技にもうまく生かす研究も進めていけるとよい。
- 全国のスポーツ科学の研究者と有機的な連携が必要。シンクタンクのリストを作って、医・科学サポート集団みたいなものをうまく配置をしていって、システムにするとよりうまく機能していく。
- 提供できるサービスは何かということの明示化が必要。暗黙知を形式知に換えて、形式知をまた暗黙知に換えていくという知のサイクルを作っていく。最低限のものをしっかりパッケージ化して、各強化拠点に供給していくことをやらなければいけない。
- 内向きのサービスタスクと、外向きのサービスタスクを一緒に考えないと、コストセンターになってしまう。
- 医・科学サポート人材の育成をスタートするのは大事だが、1～2年で簡単にできることではなく、中長期的な問題になってしまう。

<ネットワーク化について>

- 国内外のどこにいても、同じサービスを受けられるようになれば、ネットワークを結んだことになるので、パッケージを作るということが非常に大事。
- ハイパフォーマンスセンターにプラスして地域でのスポーツ科学の知見を集積しているグループとの連携・ネットワークでいつでもとれるようにやっていくことも必要。
- ネットワークを構築するとき、他競技あるいは他の分野から学んだりという人材の発掘、育成、教育は非常に重要で、そのためには複数の競技や情報の一元化を組織的に行い、どのように活かしていくのかが必要。
- 地域の医・科学センターや大学とHPCとのネットワーク化は、NFがもう少ししっかりNTC競技別強化拠点に関与することが前提。実際に地域の医・科学センターや大学等を利用するのはNF（選手）であることから、HPCとNTC競技別強化拠点だけでやり取りすることはあり得ない。

＜次世代選手の育成について＞

- 若い選手たちが決まった場所に行かないと競技が行えない中で、学業との両立をどのようにしていくのかという点も重要。
- 根拠に基づいた支援を多くの競技団体や地域の子供たちにもうまく伝えていくことが、パスウェイを構築した持続的な強化を維持していくことにつながる。
- N T C 競技別強化拠点では、拠点地域の中で優れた素質を有する子供が見出され、その拠点地域で育成・強化されていくことが求められる。

＜地域との連携について＞

- 海外では、大学の中に N T C の拠点を持っていて、医・科学パッケージや人材の発掘、競技団体との連携もできている。日本でも、大学のいくつかは N T C と同じような機能を持っているが、サポートの資源は未活用なところがある。トレーニング施設はもちろん、宿泊も可能なところもあるので、大学の活用もあり得るのではないか。
- N T C 競技別強化拠点施設に指定されていることが地域住民に知られていないので、オリンピック、パラリンピック関連のマーク、あるいは各競技団体の日頃の活躍・活動を地元の方や関係者に知ってもらうプロモーションを展開すれば、町おこしや、地域活性化戦略、スポーツコミッションにもつなげられる。
- 雇用の仕組みをうまく作っていくことで、「その地域にはこの競技がなくてはならない」、「地域を挙げてその競技を応援していく、盛んにしていく」、「子供たちがその競技に憧れてトップアスリートになっていく」といった点も大事にしていかなければいけない。
- N T C 競技別強化拠点に指定された全ての施設は、J O C ・ J P C のエンブレム等を掲示すること等について、新たな基準として整備すべき。
- 各自治体のマスタープランに、N T C 競技別強化拠点施設やその競技を応援するための方策を盛り込んでいただくという働き掛けも必要。

＜新たな施設整備について＞

- 新たな施設の整備の検討に当たっては、数多い要望の中でどのようにプライオリティーを置くのか、何処にどのように造るのか、また既存施設を利用するのか、ということも整理しなければいけない。